



「公園から行ける駅、『もりのえき』だよ」



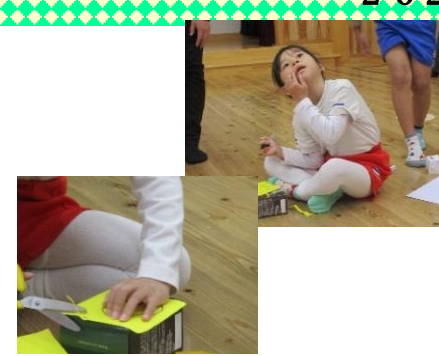
「ゆめゆめ公園」と「すしろー」をつないで町にする。
女の子が滑ったら髪が伸びる滑り台(①)
町を走るゆめバス(②)



「お菓子はここで売ってるよ」
「わあー、かっこいい」



「ここは家、こっちは畑」
「ピーマンとスイトピーを植える」



「時計の数字は？」「折り目に沿って紙を切るとびったり!!」

CASE 38
5歳児

「こんな町、あったらいいね」

協力園(豊後大野市)
おおのルンビー
1歳も園

(幼児の実態)
こども園の周辺で数えきれないほどの散歩やピクニックを楽しんできたらいおん組5歳の子もたち。10月、ピクニックに出ると、「こども園の周りは、お店や公園、学校があるね」「ここ行ったことある」「遊んだことある」「スーパーパーやラーメン屋さんもあるね」と、園の周りのことを話題にし始めました。そして、「お店や公園を作って町にすると楽しいかも?」と、地域の町を作ることになりました。

子どもたちの思いを受け止めた保育者は、自分の思い描く町づくりができるように空き箱やラップの芯、用紙の切れ端、折り紙、広い模造紙、台紙になる固い用紙、柄テープなどたくさん素材を準備しました。

材料を前に、子どもたちと保育者は、どんなふうにつけていくか話し合いました。「お店」「学校」「公園」など作りたい物がそれぞれ違い、まずは個人が作りたいものから作り始めました。

兄が小学校に通うY児は「小学校には、大きな時計があるんだよ。みんな時計を見てよ」と、校舎とそこにある時計を作り始めます。数字の並びは、「12・1・2」と保育室の時計を見ながら書き入れます。時計を書いた用紙を校舎に見立てた箱に貼る場面になると、K児がY児にこう伝えました。「箱(の面)に合わせて紙を折るんだよ。折った所に線が入るからそこを切ればピッタリ合うよ」Y児は、そのとおりに箱に沿って折り、折り目に沿って時計の紙を切っています。切り終わると「できた」と笑顔を見せます。

J児は、まず、家を作ります。家の隣のスペースを指して「ここは、畑」と説明します。「畑?」と保育者が聞くと「スイトピーとピーマンを植えるところ」と応えます。「Jくんのお父さんとお母さんが育てているスイトピーとピーマン?」と保育者が聞き返すと「うん」と応えます。J児は、両親が栽培している花や野菜の話をよくします。「スイトピーは、色水に茎をつけると花に色が付くんだよ」「ピーマンの取り入れはほくにもできる」など両親との作業の様子を語ります。身の周りにもあるものを作る一方、「マッコウを作りたい」「家からすぐ行けるスシローを作る」と「町にあったらいいな」という思いで店を作る子どもたちもいます。

活動の終わりには、工夫したところや見せたいところを話し合う振り返りの場を設定しています。「スシロー」の店では「すしろー」と自分で書いた看板を紹介したり、「お寿司の値段も書いた方が『スシロー』らしくなるよ」とアイデアが出たりしていました。お菓子やさんでは、屋根をお菓子入れにするアイデアを紹介して「それ面白い」「楽しいね」と、友達同士で表現を楽しむ姿がありました。

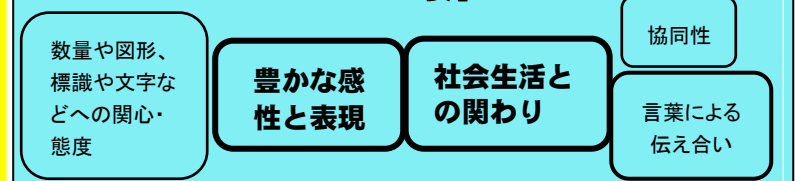
町づくりが始まって5日ほど経過しました。みんなでも何度も遊びに行った公園を作っているK児は「滑り台って髪の毛がヒラヒラして楽しいよね。この滑り台は秘密があるのよ。♡がついてるでしょ。女の子が滑ると髪の毛が少し伸びるの。嬉しくない?」と♡マークがある滑り台を指して友達に話します。すると友達も「おもしろい!」「公園の名前、付けようよ」「ゆめゆめ公園はどう?」「話が弾みK児は、『ゆめゆめ公園』と公園名を書きました。

2人の会話を聞いていた友達は「ぼくの家を公園の近くにくっつけていい?」「家から歩いて行ける『すしろー』もあるし」と、公園とつながりたい思いを伝えます。K児も「いいよ。にぎやかになるから。ここがいい?」と公園とスシローをつなげます。

K児は、町にバスも走らせています。「どこでも停まる安全な『ゆめバス』。乗りたい人は誰でも乗れるよ」と近くの友達に話しています。運転席は一段高く、バスの車体には動物の絵が描かれています。こうして家、お店や公園がつなぎ合わされて、町が少しずつ広がっていきます。

次の日、K児は、「駅もあるといいなあ」と、箱で「もりのえき」を作り、駅名も書きました。「お母さんと電車に乗ってどこかに行きたいな。お客さんも乗せてあげたいなあ」とつぶやいています。振り返りの場で、K児が「もりのえき」を紹介すると、聞いていた友達は手をたたく「いいねえ」と賛同しました。そして、「もりのえき」だったら森を作る?」「駅には電車もあるといいねえ」「電車に乗る時、切符もいるよ」と、聞いていた友達から駅らしくなるアイデアが出されると、K児は「うんうん」と頷いています。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「10の姿」



心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりして、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

事例から見られる10の育ち

子どもたちは、町づくりで、行ったことのあるお店や遊んだ公園、生活している家の特徴を捉え、箱やラップの芯など自分のイメージに合う材料を選んで活動をしている。活動の中では、地域の町の再現や夢のある町を創作したり、友達同士で町と町をつなぐ過程を楽しんだりしながら表現する喜びを味わう姿が見られる。

振り返りの場では、友達と一緒にこれまでの経験を話したり、願いを語ったりしながら思いを出し合い、町を広げるための工夫や表現を一層楽しむ5歳児後半の姿が見られる。

事例から見られる10の育ち

子どもたちは園の生活や遊びにおいて保護者や周囲の人々に温かく見守られたり、地域の公共物で遊んだりして思い出を残してきている。

J児は、地域で花や野菜の栽培を営む父母の仕事を手伝うことで、自分が役に立つ喜びを感じたり、父母の仕事ぶりに憧れたりして、地域での生活を共に楽しんでいる思いを創作に取り入れている。K児たちは、地域の公園で遊んだ楽しい経験を起点に「あったらいいな」と空想する遊具や建物を創り出している。慣れ親しんできた地域に実存する施設や家、学校等に、自分の夢や願いを込めた建物を作り足して町を広げようとする活動には、地域に親しみをもち、さらに地域とのつながりを意識する子どもたちの姿が見られる。

豊かな感性と表現・社会生活との関わり
環境構成のポイント

- ピクニックの感想や子どもの願いを取り入れた指導計画の作成。
- 自分の思いや考えを伝えたり、考えを受け入れたりする友達の存在。
- 表現する喜びや表現の過程の楽しさを共有できる友達の存在。
- 自由に選択、表現するための豊富な材料の準備。(空き箱、ラップの芯、折り紙等)
- 制作意図やより楽しい町づくりの構想を共有する振り返りの場の設定。
- 自信をもつて表現活動ができるように、子どもの生活の背景を理解し、制作意図に共感する保育者の存在。